

超越的存在になる舞踊の「境界」考

—仏舞の行道をめぐる—

お茶の水女子大学 弓削田綾乃

1. 目的

近年、地域伝統芸能「仏舞」の演出に着目した研究を継続してきた結果、「行道」と「仏になる舞踊」という2つの構造からなり、「今、この瞬間に仏が現れ、仏のありがたさを伝え、去っていく」来迎の様子を動的に展開することが明らかになった。特に「行道」については、宗教的意味合いが強い行事では、ご本尊のそばから演者が登場し舞台まで練り歩く。こうした構造は、宗教的行為であるだけでなく、仏の世界と人間の世界の境界を越える表現のために必要なシステムなのではないかと推測する。

日本の伝統芸能には、舞台への入退場を見せたり練り歩いたりする演出が多数存在することからも、本研究では、仏舞の入退場である行道に焦点をあてたい。舞台構造、演者の動作、参与者の感想などを分析し、仏教思想あるいは伝統芸能における機能や思想等も参照して解釈していく。

2. 対象

仏教寺院の法要で奉納される仏舞として、京都府舞鶴市松尾寺（5月8日灌仏会）、福井県福井市糸崎寺（4月18日千手観音の縁日）に伝承する芸能を事例とする。両寺院は、ともに真言宗に属す。

3. 方法

現地調査で採録したVTR映像、写真、インタビューなどをもとに、入退場に関わる舞台構造と動作を明示する。そして明らかになった特徴について、仏教思想および伝統芸能に関する諸文献を参考に、機能や思想等を読み解く。

4. 結果と考察

(1) 舞台構造と動作の特徴

松尾寺では本堂内の外陣（参拝者が座す場）の端に約2×3mの舞台が設置されている。本尊脇の楽屋から演者は1人ずつ登場する。合掌あるいは楽器を構えながら、内陣（本尊が置かれる場）の中を1列になり、すり足で進む。その間、僧侶による声明「四智梵語」（真言宗）が詠じられる。舞台での舞が終わると、入場と同様に退場し、本尊脇に入る。

糸崎寺には本堂正面の屋外に設置された約4m四方の舞台がある。本堂から舞台までは、石で作られた通路が渡されている。本堂内の本尊の奥に楽屋があり、そこから1列になって登場した演者らは、本堂を降りて通路を渡り、舞台にあがる。

合掌あるいは楽器を構えながら、片足を出しては両足を揃える歩法で進んでいく。その間、楽人により「越天楽」が奏される。舞台での舞が終わると、入場と同様に退場し、本尊奥に入る。

いずれも楽屋となる場所から舞台まで、一筋の通路が設けられており、楽が奏される中、ゆっくりと進む。松尾寺はすり足で、糸崎寺は片足を出してはもう一方を寄せて揃える歩法である。どちらも地面から足は極力離さない。

(2) 「行道」の機能と思想

行道とは、僧侶が列を組み、読経しながら練り歩く行為であり、「行」をおこなう「道」、すなわち経をあげていることと同じとみなされる。また、寺院法要で舞楽を伴う場合、僧侶・演者が舞台を巡る行道をおこなう場合が多い。松尾寺と糸崎寺の仏舞では、音楽や舞の動作などに舞楽の要素が散見するため、舞楽法要の意味合いが強いと考えられる。そこでは、舞台にあがる前に演者が仏の姿で「行」をおこなうことによって、自らの身を清めるとともに場を浄化する機能が働くと考える。

一方、参与者の声として、演者からは仮面による視覚の狭窄や間隔のつかみにくさ等の身体感覚に関する感想以外にも、「衣裳や仮面をつけると心身が引き締まり、舞台まで歩くと仏様になった気分になる」というものもあった。また観覧者においては「そろり、そろりと出てくる時に仏様を感じる」「舞よりも歩く姿がありがたい」と手を合わせる姿がみられた。参与者にとって、楽屋と舞台を結ぶ一連の設定が、偶像崇拜としての仏様の出現を実感させる場になっていると考えられた。

以上のことから、仏舞の行道とは、舞台上での舞踊行為に先立ち、演者の身と場を清め、参与者に仏の具現を認識させる「境界」として機能していると考察する。

(3) 伝統芸能の表現にみる解釈

舞台への道筋の設置もしくは練り歩きという形式は、舞楽法要以外にも、多くの神事芸能、あるいは古典芸能などにみられる。「橋がかり」「道行」「渡御」「還幸」などは、空間の出（入り）の美を表現するだけでなく、超現実世界の時間・空間の設定の上でなされる演出と解釈される。つまり、彼の世とこの世との境界の役割を果たす。

仏舞でも、偶像崇拜としての超越的存在（＝仏）になるにあたり、精進決済や仮面・衣裳の装着などで段階的に醸成されてきた身体変容が、境界となる道筋をゆっくり歩むことで、より確実に達成されるのではないだろうか。そうした意味で、ご本尊から現れ消えていくかのような設定も、必然的で効果的な演出であると考えられる。